

国際人を 目指して

県立大生セブ島研修

□上□

2016年、県立大に経営学部国際経営学科が誕生した。1年と3年で海外研修を必修化。ビジネスで通用する英語力の習得を図る。52人の学生は8月下旬、フィリピン・セブ島の語学学校で3週間にわたり「英語漬け」の日々を送った。研修に同行し、国際舞台で活躍できる人材の育成を目指す取り組みに迫った。(この連載は佐世保支社・後藤洋平が担当します)

英語漬け

一対一で課題探る



フィリピン人講師からマンツーマンレッスンを受ける吉富さん
=フィリピン・セブ島、イデア・アカデミア

いくつかのブースに仕切られたフロアでは、絶えず英語レッスンの声が響いている。「え、分かるじゃない」。1年の北村光希さん(18)は、現地の講師との一対一の授業につ

いくつかのブースに仕切られたフロアでは、絶えず英語レッスンの声が響いている。「え、分かるじゃない」。1年の北村光希さん(18)は、現地の講師との一対一の授業につ

アはある。講師は全員、フィリピン人だ。島には多くの語学学校があり、多くは人件費の安さを背景にマンツーマンでの指導を売りにしている。料金の安さに加え、リゾート地のため治安の良さや利便性も留学先として選ばれる理由という。

学生は毎日10時間以上励んだ。「学ぶというよりは慣れる」という感覚に近かった。北村さんは「貴重な経験」と話した。

研修に参加するには「TOEIC600点以上」という条件をクリアする必要がある。一定の学力を身に付けておかなければ、厳しいレッスンを重ねたところで十分な効果が期待できないからだ。そのため入学後、英会話話を専門とする外部講

師を招き試験対策にも取り組んでいる。唯一の2年生、吉富奈央さん(19)は昨年、点数不足で参加できなかった。成績が伸び悩み、別の学科に移ることも頭をよぎったが、セブ島に行くことを目標に奮起。同学年と一緒に来るのができなかった。幼いころ、沖縄に住んでいた。米軍基地などで英語を流ちょうに話す日本人の姿に憧れを抱いた。「将来は外国人を相手にした仕事に就きたい。そう思って入学を決めた。昨年から飛躍的に成績は伸びた。しかし、現地講師の英語は聞き取れず、こちらの発音はなかなか通じなかった。それでも、納得するまで教えてくれる勉強の形は理解を深めるためにはよかったと感じる。「セブ島に来たからこそ、これまでの勉強で足りない部分が分かった」。向上心に、さらに火が付いた。